3．　プロサッカー選手のキャリア移行に関する実態

はじめに

アマチュアスポーツとは異なり，移籍や競技引退などのキャリア移行は，プロフェッショナルスポーツに従事する競技者に対して大きな心理社会的変換を迫ることになる．特に，キャリア移行の中でも競技引退は，彼らにとって大きな出来事となり，「プロ競技者としてのそれまでの自分」から「新しい自分」の獲得を迫られることになる．そしてそれは，決して容易な課題とは言い難い．そこでは様々な問題が生起し，社会生活に対して不適応を呈するような一部の元選手を認めることがある[3) 9)]．

「アイデンティティ再体制化」[4)]といった課題解決から，ここでは，移籍や競技引退を含むキャリア移行に伴うこのような心理的困難さを理解しようとしている．スポーツ選手の競技引退に対して，本研究者らは体力の衰え，取り巻く環境の変化，転職などによる一般の「中年期の危機」と類似した心性が存在し，彼らに早く訪れたといった印象を抱いている．

キャリア移行をいずれ体験することになるスポーツ選手が競技に専心するためには，自分自身だけではなく周囲もまたキャリア移行後の適応問題を理解する必要があると考えられる．キャリア移行が当事者にとって有意味であるためには，専門的介入のよりどころとなるべきキャリア移行援助プログラムが必要であり[2)]，このプログラム確立のための基礎的資料の収集が急務となっている．そこで本研究は，プロサッカー選手のキャリア移行の実態を把握し，そこに生じる問題や課題を明らかにし，更に，キャリア移行に伴う適応様態並びに再適応過程を明らかにすることを目的とした．

具体的には，1）プロサッカー選手のキャリア移行の実態と2）キャリア移行を経験した選手の事例という2つの側面から研究資料の収集をはかった．

3-1. 調査の手続

本研究における調査実施手続を図1に示す．

ここでは，最終目標である「キャリア移行援助プログラム確立に対する具体的方略の提示」へ向けて，左側には本研究における「調査実施プロセス」を示し，右側には各調査実施から「期待される結果」を示している．

調査実施対象や調査実施時期については，結果および討議にその詳細を示す．

3-2. 結果および討議

1) プロサッカー選手のキャリア移行の実態

キャリア移行の実態を把握するために，各チームのフロントに対して平成5年度から8年度までの4シーズン中に，自チームから移籍した選手（「移籍に関する調査」）と引退した選手（「引退に関する調査」）についての実態調査を実施した．調査依頼の段階で調査実施の快諾を得たのは，Ｊリーグ所属の17チーム中13チームであった．調査開始は平成9年6月から11月現在に至る．現段階までに調査実施資料が回収されているのは8チームである（回収率8/13）．その中で，平成5年度シーズンから8年度シーズンまでにキャリア移行を経験した人数の変遷を表1と図2に示す．4シーズンを通じての各チームのキャリア移行の内訳を平均で求めたところ，移籍が22.5名，引退が9.8名であった．各チームから移籍していったプロサッカー選手は平均24.5（18-39）歳であり，引退していった選手は平均25.3（19-38）歳であった．

いくつかの側面からクロス集計を行ったところ，以下に示すような特徴が認められた．

移籍の実態（表2）として，移籍時にレギュラーで主

力であった選手はチーム方針との不一致を理由とし,

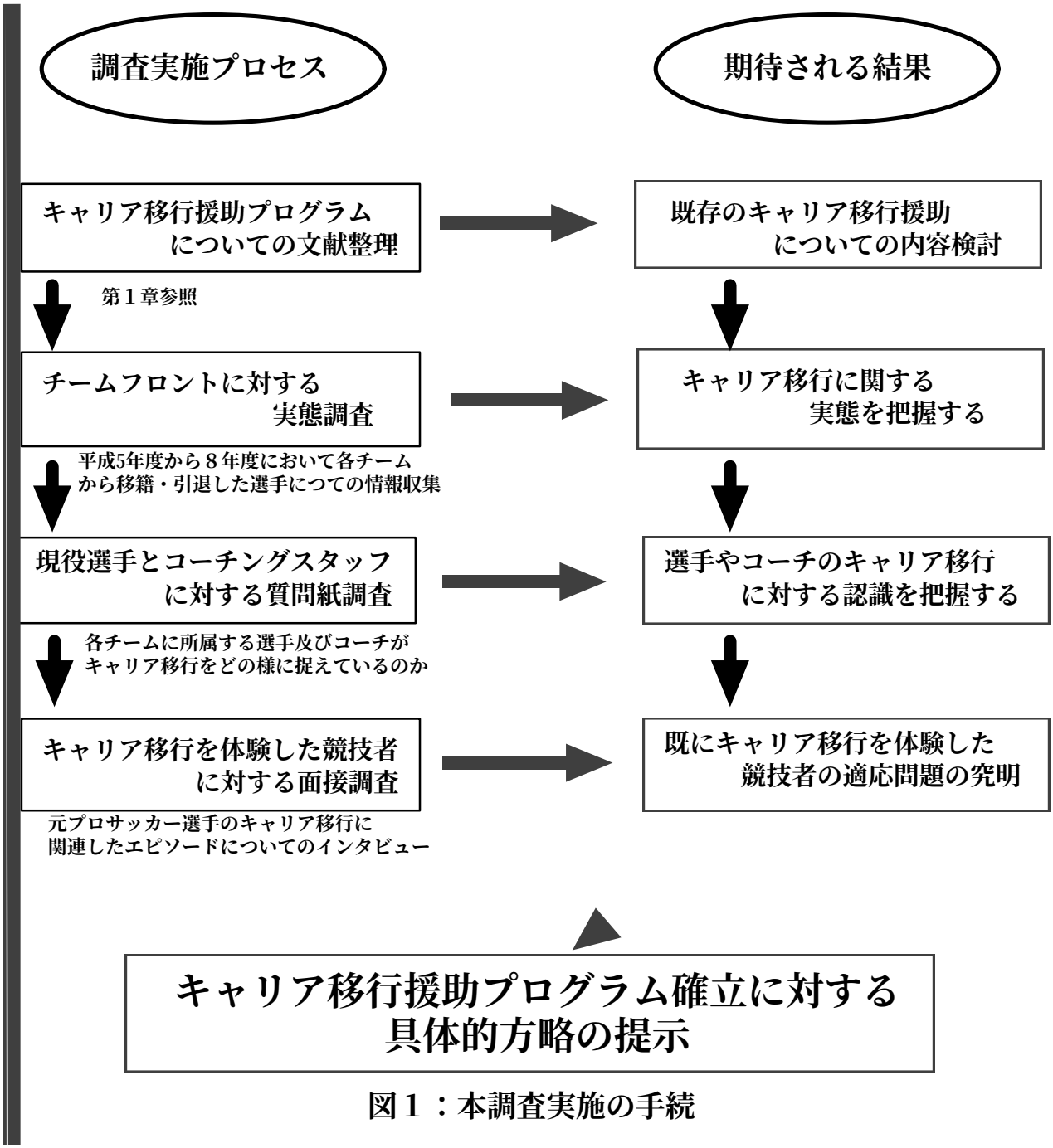

調査実施プロセス
期待される結果
キャリア移行援助プログラム
についての文献整理
既存のキャリア移行援助
についての内容検討
第１章参照
チームフロントに対する
実態調査
キャリア移行に関する
実態を把握する
平成5年度から８年度において各チーム
から移籍・引退した選手につての情報収集
現役選手とコーチングスタッフ
に対する質問紙調査
選手やコーチのキャリア移行
に対する認識を把握する
各チームに所属する選手及びコーチが
キャリア移行をどの様に捉えているのか
キャリア移行を体験した競技者
に対する面接調査
既にキャリア移行を体験した
競技者の適応問題の究明
元プロサッカー選手のキャリア移行に
関連したエピソードについてのインタビュー
キャリア移行援助プログラム確立に対する
具体的方略の提示

図１：本調査実施の手続

表1：各シーズンにおけるキャリア移行

	キャリア移行		
	移籍	引退	TOTAL
＜シーズン＞			
５年度	25	20	45
６年度	44	18	62
７年度	60	21	81
８年度	49	19	68
TOTAL	178	78	256

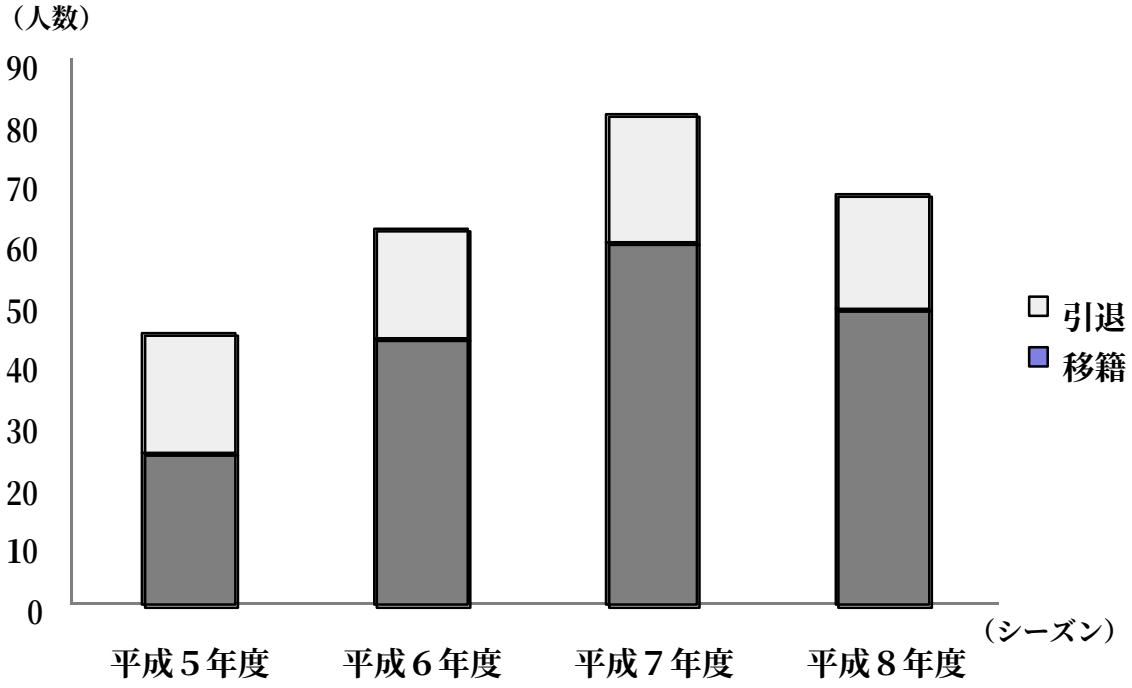


図２：各シーズンにおけるキャリア移行

表２：移籍の実態

	移籍時の選手地位			
	ﾚｷﾞｭﾗｰで主力	ﾚｷﾞｭﾗｰで主力でない	ﾚｷﾞｭﾗｰでない	Total
	(n = 19)	(n = 27)	(n=132)	N= 178
・理由**				
競技力低下	1	2	2***	5
ﾁｰﾑ方針不一致	9*	6	22**	37
選手補強の影響	7**	15	85**	27
その他	2	4	23	29
・移籍先*				
Ｊリーグ	5	11**	26**	42
ＪＦＬ	3**	11	61***	75
アマチュア	0**	2	40*	42
海外	11*	3	5*	19
・納得の程度*				
全く納得	10	15	81	106
少し納得	3	8	32	43
納得していない	5*	1	3*	12
わからない	0	3	13	17
・移籍の予期**				
かなり以前から	7	7	56	70
直前に	12	16	73	101
全くなかった	0	4*	2*	6
わからない	0	0	1	1

*p< .01　*p< .05　***p< .10

表３：引退の実態

	引退時の選手地位			
	ﾚｷﾞｭﾗｰで主力	ﾚｷﾞｭﾗｰで主力でない	ﾚｷﾞｭﾗｰでない	Total
	(n = 10)	(n = 13)	(n= 55)	N = 78
・理由*				
競技力低下	7 *	2	9**	18
ﾁｰﾑ方針不一致	1	5**	7	13
選手補強の影響	1*	5	32*	38
その他	1	1	7	9
・現在*				
指導者	5	5	13***	23
指導者以外	5	3	15	23
消息不明	0*	5	27**	32
・納得の程度*				
全く納得	8*	3	22	33
少し納得	2	4	16	22
納得していない	0	5*	5	10
わからない	0	1	12***	13
・引退の希望**				
希望していた	7*	1*	25	33
希望していない	3	12	25	40
わからない	0	0	5	5

*p< .01　*p< .05　***p< .10

おおよそ納得して移籍を果たしており，多くの場合，海外の他チームに移籍し，更なる競技力向上のための機会を得ている．また，レギュラーでありながら主力ではない選手は，Ｊリーグのチームに移籍する者が多く，彼らが移籍の意志を持っていることについてフロント側もおおよその予測ができていた．レギュラーでなかった選手は，競技力低下よりもチーム方針との不一致や新たな選手補強を理由として，JFL やアマチュアのチームへ降格移籍をしたが，多くの場合納得しており，彼らが移籍の意志があることをフロント側もおおよそ予測していた．

引退の実態（表3）として，引退時にレギュラーで主力であった選手の多くは競技力低下を理由として挙げており，自らの希望で且つ納得した上での競技引退であった．また，レギュラーでありながら主力ではない選手は，チームの方針の不一致を理由として挙げている者が多く，自らが希望してはいるものの，納得しての引退ではないことが多い．レギュラーでなかった選手は，新たな選手補強を理由として挙げている者が多く，引退後に指導者となっている者は少ないという結果が得られた．

「サッカー選手のキャリア移行に関する調査」は，Ｊリーグ及び JFL に所属するチーム中，11 チーム（J：7 チーム，JFL：4 チーム）に所属するプロサッカー選手に対して実施された．

対象となったプロサッカー選手の内訳は JFL：69 名，J：133 名であり，平均年齢は 23.5（18-33）才，既婚者 45 名に対して未婚者は 148 名(不明 9 名)であった．競技継続平均 14.9（9-24）年，現在所属しているチームには平均 2.6（1-11）年間所属していた．

調査対象となったプロサッカー選手の移籍体験の有無を分類したものを図３に示す．

移籍体験者は 52 名，移籍未体験者は 150 名であり，移籍体験者を４つの群に分類した．JFL→J といういわゆる昇格移籍を体験した 7 名を昇格移籍群，ＪからJFL やアマチュアへのいわゆる降格移籍を体験した 23 名を降格移籍群，Ｊ→JFL→Ｊという移籍体験を有する 6 名を昇・降格移籍群，Ｊ→Ｊという移籍を果たした 16 名を同格移籍群とした．

ここでは，おおよそ４分の１の選手が移籍を体験しており，体験者は未体験者よりも年長であったことが認められる．また，移籍体験者の多くが「降格移籍」を体験している一方で，「同格移籍」を果たしている選手は調査対象者全体の３%に相当しており，Ｊから Ｊの他のチームへの移籍が困難な状況にあることが伺われる．

次に，移籍の捉え方に関する SCT（文章完成法：「私にとって移籍は…」）において，「新しいスタートである」や「チャンスである」など，自分にとって歓迎すべき好ましいものであると肯定的に捉えているものを positive，「辛いことである」や「考えたくない」など，自我を脅かすような否定的な意味合いを持っているものを negative，「考えられない」や「仕方のないこと」など，肯定的意味も否定的意味も持っていないものは neutral，そして，「良いことでもあり，悪いことでもある」や「終わりでもあるが，始まりでもある」など，肯定的な意味合いと否定的な意味合いが共存している場合を ambivalent というように，４つのカテゴリーに分類した．

これらの内容を，移籍体験者と未体験者で比較するために，χ^2 検定を行ったが，有意な差は認められなかった．しかしながら，参考までに検討を加えると，移籍体験者の大半が移籍を肯定的に捉えている一方で，降格移籍群においては，移籍の捉え方にばらつきが認められた（図４）．

次に，これまでに得られた結果を考慮して，「降格移籍群が移籍において特異な体験を有しているのではないか」と仮定し，以下のような分析を行った．

移籍体験者のうち，降格移籍群と降格移籍群以外とを比較したところ（図5），引退後の生活に対する懸念の内容に相違が認められた（χ^2 (2)=11.2, $p < .01$）．そこでは，降格移籍群以外の移籍体験者の大半は，引退後の生活で最も気がかりなこととして，仕事や生活，経済力の安定についての懸念を挙げていることが伺われた．それに対して降格移籍群は，「考えられない」や「わからない」などと回答する者が多く，次いで仕事や生活，経済力の安定を挙げることが認められた．つまり，降格移籍は「プロサッカー選手である自分」

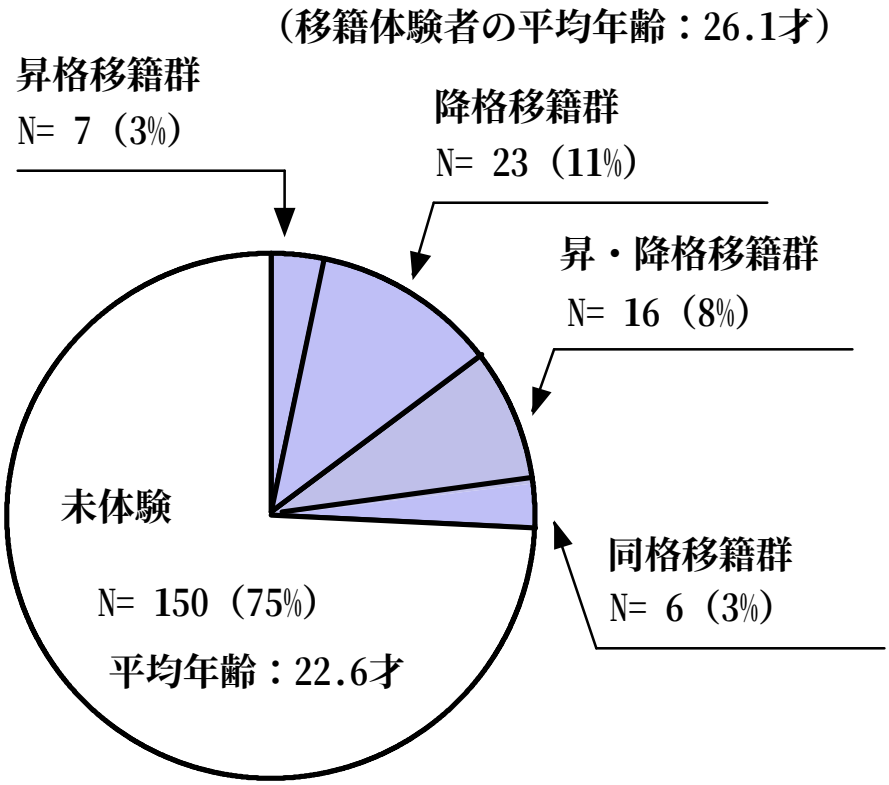


図３：調査対象者の移籍体験

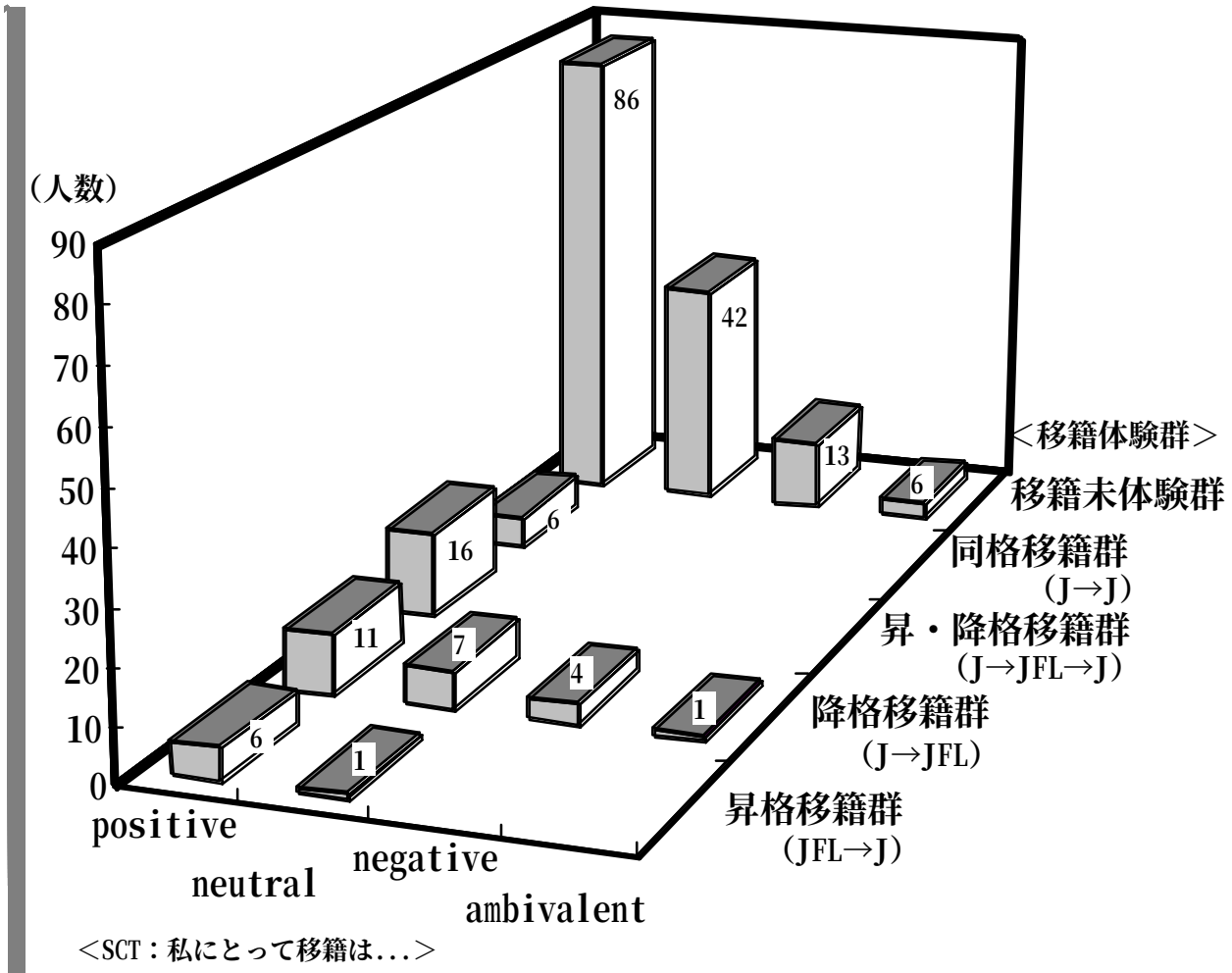


図４：各移籍体験群別の移籍の捉え方

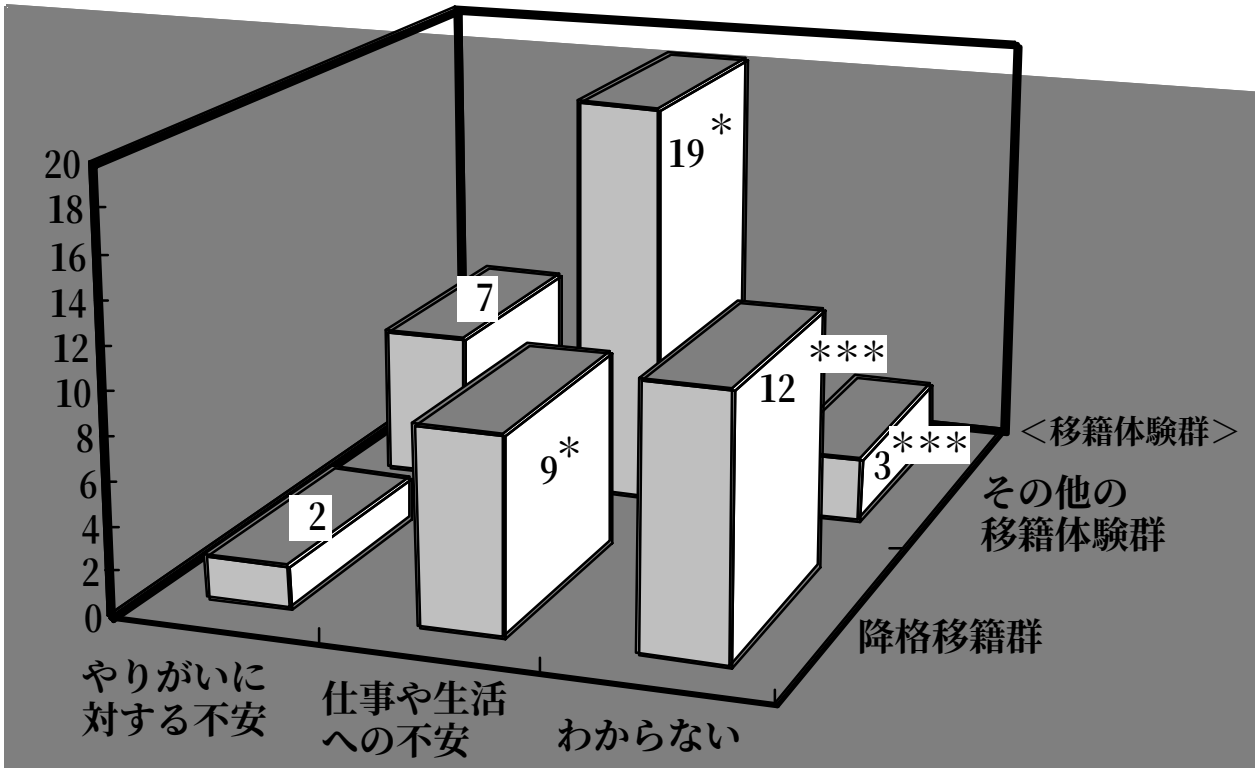
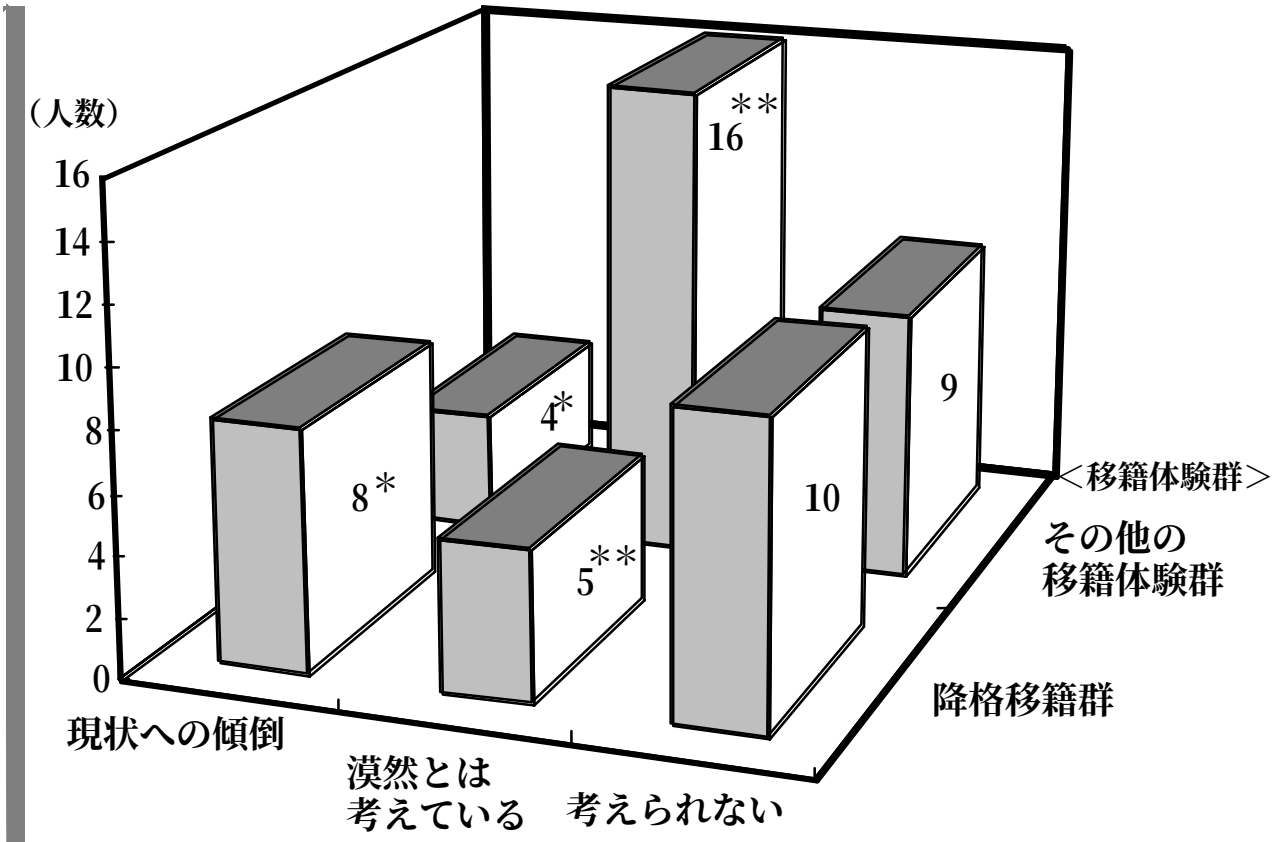


図５：移籍体験者における引退後の懸念



＜SCT：引退後に備えて私は...＞　　＊p< .10 ＊＊p< .05

図６：移籍体験群における引退後の展望

を維持できるという意味では，概して肯定的な捉え方ができるが，競技引退後の展望を阻害してしまうのではないかということが推測された．

そこで，移籍体験者の中で降格移籍が引退後に備えてどのような状況にあるのか（図6）についてχ^2検定を行ったところ，有意な差が認められ（$\chi^2(2)=6.54, p<.05$），残差分析の結果，以下のような点が明らかとなった．降格移籍群は，降格移籍群以外に比べて，引退後の備えについて漠然と考えている者が少なく，「今を精一杯がんばるだけ」や「サッカーをより一層勉強する」など，現状に傾倒している者が多いという傾向が認められた．つまり，「降格移籍は，移籍後の状況への傾倒を余儀なくされる体験である傾向が強い」といえよう．

これらの現役選手に対する調査結果をまとめると，移籍体験はプロ競技者にとって概して肯定的な意味合いを持っているが，降格移籍は，移籍後の状況に対して傾倒することを余儀なくされ，引退後の展望をおろそかにしてしまうということが導き出された．

上記の結果は，各チームのフロントと各チームに所属する現役選手からの２側面から得られた資料を分析した結果であり，両者を直接比較することは，不可能であるといえる．また，本研究で得られた資料からは，移籍体験者と未体験者との間に明白な差異が認められてはいない．

しかしながら，「アイデンティティ¥再体制化」の観点から，プロサッカー選手にとって移籍体験は，必ず迎えることになる「競技引退」対して，何らかの準備性を帯びた内容が含まれるべきであろう． その点も考慮すると、移籍体験者に焦点を当てたことで、この種の問題に対して充分有益な資料提供ができたと考えられる．

2) キャリア移行を経験した選手の事例

インタビューは分析モデル（図7）に従い，キャリア移行を既に体験している元プロサッカー選手に対して実施された．ここでは，競技引退後の適応問題に影響すると予測される２要因に関連したエピソードを中心として一事例を提示する．「社会化予期」とは，「対処すべき心理社会的な発達課題への気づき」を意味しており，具体的には，従来の「スポーツ競技者である自分」では，今後の自己を支えていけないことを受け入れようとする内的作業が含まれている[6]．次に取り上げた「時間的展望」とは，「ある一定時期における個人の過去・現在・未来についての見解の総体」を意味し，そこでは「過去の自分を肯定的に受け入れ」「現在に対して積極的に取り組み」，そして「過去の自分と現在の自分の延長線上にある自分の将来を展望する」といった連続性が重視される[7]．事例公表については，調査協力者より了承を得ているが，その個人が同定されない程度に付帯情報を若干修正，省略している．

アルバイトで生計を立てている元Ｊリーガー

本事例は，JFL 所属チームからＪリーグ所属チームへ移籍し，その後の自由契約から地域リーグのチームに移籍し，数カ月で競技引退を迎えた．この間４年の歳月を要している．現在はアルバイトによって生計を立てている．

プロ選手としての契約を結ぶまでの生活はほとんどサッカー中心に過ごしており「大学卒業までのサッカー人生が最高でした」と当時を振り返っている．これまでの進路希望は，常にレベルの高いサッカーを志向し，それに合致する先を決定してきた．もちろんプロ選手になることが本人の夢であった．JFL 所属のチームからＪ所属のチームに移籍を果たすが，いずれも第一線で活躍する機会には恵まれていない．この頃から「自分の考えるのと，他の人が考えるサッカーが違う．どうして」と悩むことが多くなってきた．スタッフへの信頼感も薄れ，投げやりな態度で練習に臨むことがしばしばあったようである．更に怪我も多く，試合に出れるチャンスを逃すことが多かった．「早く怪我を治して復帰したい」と思いながらも「怪我ばかりしているからプロ失格だな」と半ば

あき

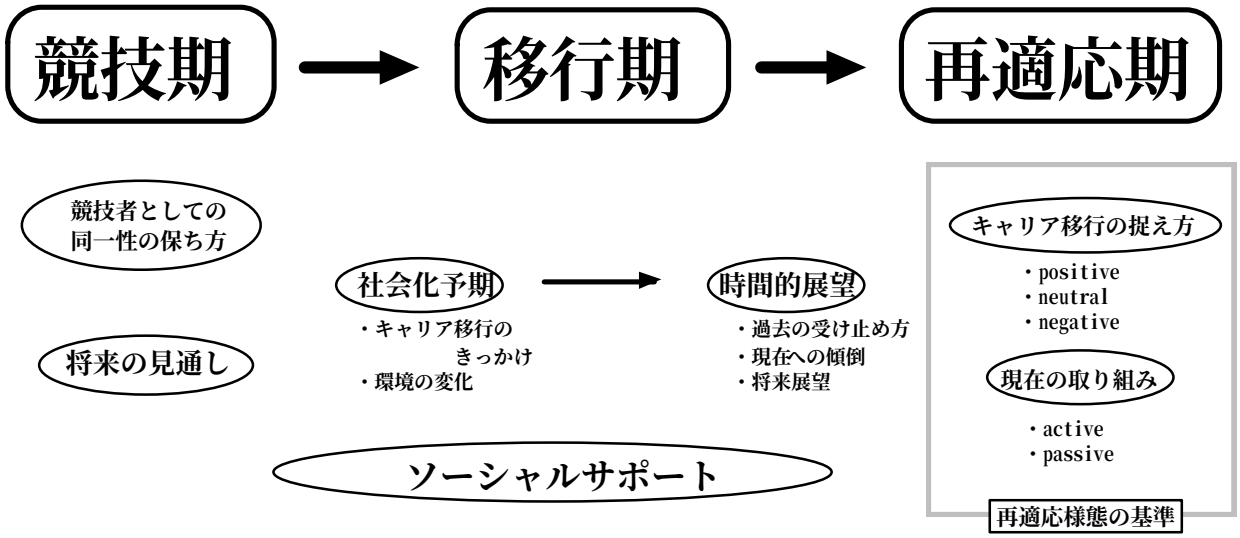

競技期
移行期
再適応期
競技者としての
同一性の保ち方
将来の見通し
社会化予期
・キャリア移行の
きっかけ
・環境の変化
時間的展望
・過去の受け止め方
・現在への傾倒
・将来展望
ソーシャルサポート
キャリア移行の捉え方
・positive
・neutral
・negative
現在の取り組み
・active
・passive
再適応様態の基準

図７：分析モデル

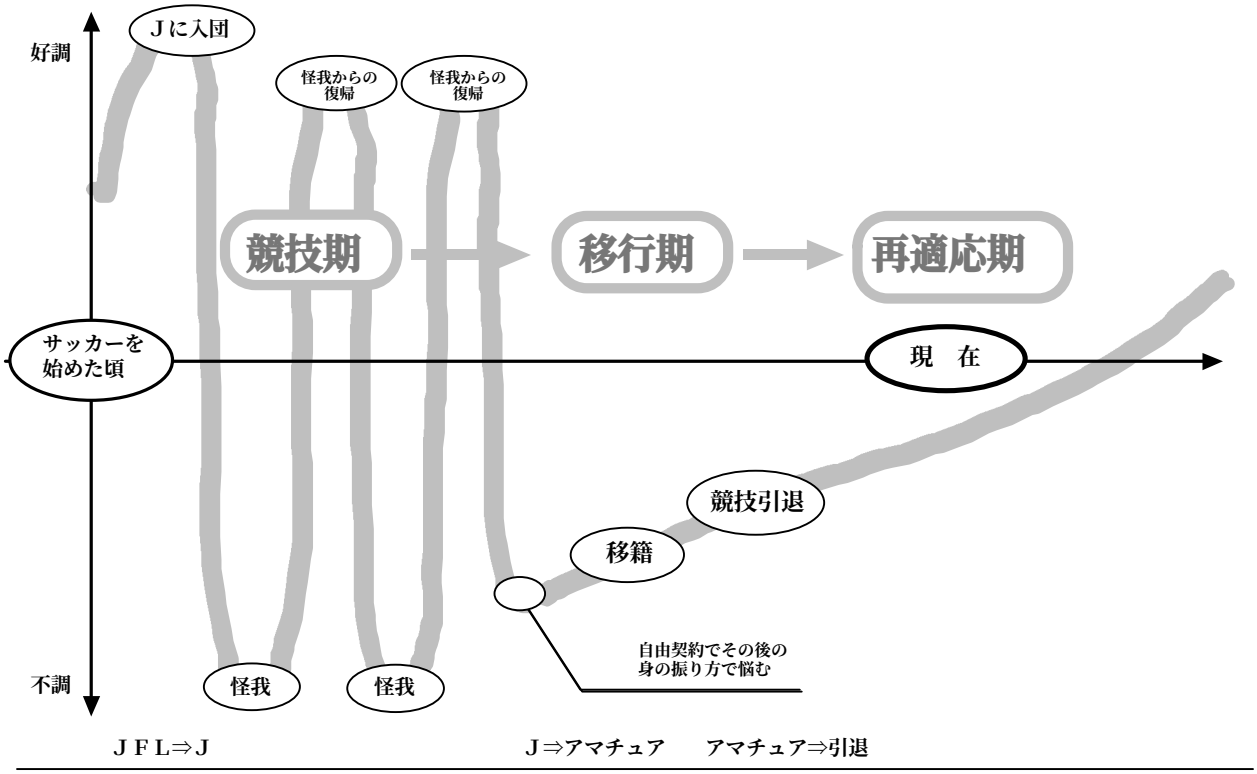


図８：被験者のライフライン

らめ気分もあった．その後，２年目のシーズン終了と同時に自由契約となった．「プロとしての実力に欠ける」とのフロント側の指摘に対して，「怪我ばかりしていたから仕方がない」と納得したものの，本人の中ではまだプロ選手としてやっていく自信に満ちていたようである．「30 歳くらいまではまだプロ選手としてプレイできるだろう」そんな気持ちがあり，漠然とではあるが「プロをやめたら教師になるか，あるいはプロで貯めたお金を使って，何か事業を興せばいいや」と考えることもあった．しかし，「教師になるにも事業を興すにもそれなりの修業が必要なことは分かっていた．だけど当時は何もする気が起こらなかった」と，当時引退後に対する具体的な取り組みを始めようとは考えていなかった．

解雇通達を受けた１ヶ月後に地域リーグ所属のチームに移籍した．そこは JFL への昇格を強く目指しているチームであり，彼はその上昇志向の強さにひかれたようであった．しかし，昇格のための重要な試合に惨敗を喫したことから「このままサッカーをやっていてもいいのかな．今までサッカーばかりやってきたけれども，何か違うぞ」「30 歳で引退してゼロから始めることを考えると今が潮時かな」と思うようになっていた．そこでの競技引退を自分にとって「進歩でも後退でもなく，今までの自分は死んで，またこれから違う人生を始めるきっかけ」と捉えている．それは彼が 27 歳の時であった．現在はアルバイトで生計を立てている．「いずれ正社員になると思うんだけれど，先のことは全く分かりません」と今後の生活についての不安をのぞかせていた．

本事例をまとめてみると（図8），彼にとってプロサッカー選手になるという夢が実現したことは，その方面での（プロサッカー選手としての）アイデンティティを一時的にも獲得したものと考えられる．しかしそれは束の間であり，その後，戦力外通達から「プロ選手としての自分」を捨てざるをえなかった移籍を体験している．そして，競技引退を迎え，「スポーツ競技者ではない新しい自分」を求めて既に新たな社会生活を始めている点では，アイデンティティ再体制化の渦中にある事例であると捉えることができる．移籍については「サッカーを続けるという意味ではサッカー選手にとって幸せなこと」と捉えており，２回の移籍体験は本人にとって肯定的な意味を含んでいた．また，移籍体験に競技引退に対する何らかの準備が含まれているとすれば，Ｊからアマチュアチームへの降格移籍が，ひとつの社会化予期のきっかけになっていると捉えることができる．しかしながら，「進歩でも後退でもなく，今までの自分は死んで」というように「競技引退」を自分にとって肯定的に捉えることが出来ず，自分がプロサッカー選手であったことと現在の生活とのつながりにおいて，連続した意味づけが未だなされていないことから，調査時点での本事例には，時間的展望に一貫性が認められてはいない．従って，本事例は，現状において少なからず不適応状態にあると判断できる．特に，「今後，やりがいが少しでも出てくるように，今の仕事を頑張ろうとは思いますが，果たして続けていけるかどうか」と，将来展望に少なからず困難さを感じている点では，今後，更なる模索が必然的に生起するのではないかと予測された．

3-3.キャリア援助プログラムの確立に対する提言

若干の提言を最後に述べる．

発達的プロセスの中で起きる様々な「変化」に対する対処は必然であるのと同時に，その後の発達的プロセスを歩む上で大きな意味を持つ．それは，その「変化」後の心理社会的な問題の生起に大きく影響する．従って，これらの「変化」に対して安易な取り組みをしてしまうことは，その後に同種の問題を積み残すことになり，ひいては不適応を引き起こすという事態に発展しかねない．逆に，移行後の社会生活に対する適応は，選手自身が積極的な取り組みをなす対象を模索の中から見出し，自分を取り巻く環境に対して自律的な働

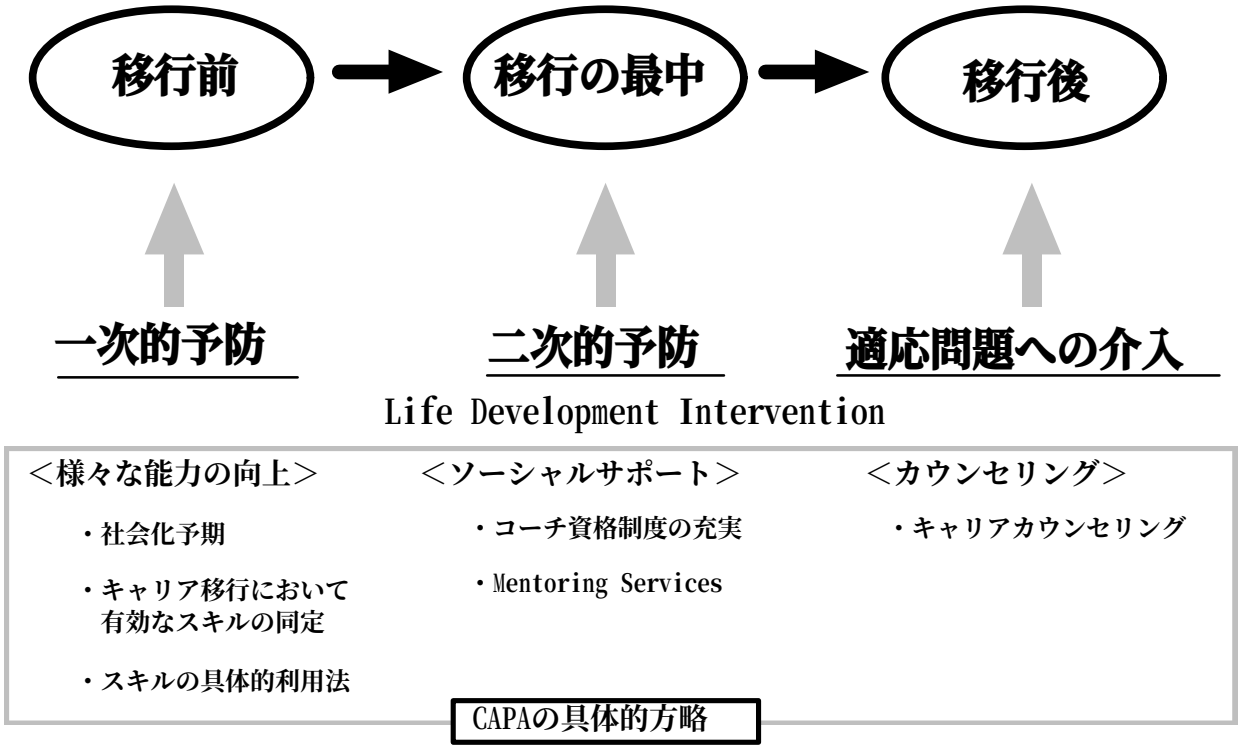


図９：生涯発達的介入（Life Development Intervention）

きかけをすることによって促進されることになろう[8]．そこで，本研究ではLDI（Life Development Intervention：生涯発達的介入）[1]を有益な枠組みとして提案したい（図９）．

文　献（Reference）

1) Danish, S. J., Petitpas, A.J ., & Hale, B. D. (1993) Life development Intervention for athletes: life skills through sports. The Counseling Psycho-logist, 21：352-385.

2) Gordon, R. L. (1995) Career transitions in competitive sport, In: Morris T. & Summers J. (Eds.), Sport Psychology: theory, applications and issues. Sydney：pp.474-501.

3) 中込四郎（1996）競技引退後の同一性再確立の過程，平成6-7年度文部省科学研究費補助金（一般研究Ｃ）研究成果報告書（課題番号：06680085）：1-78.

4) 岡本祐子（1994）成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究．風間書房：東京

5) Pearson, R. E. & Petitpas, A.J. (1990) Transition of athletes: Developmental and preventive pers-pectives. Journal of Counseling & Development, 69：7-10.

6) Petitpas, A., Danish, S., McKelvain, R., & Murphy, S. (1992) A career assistance program for elite athletes. Journal of Counseling & Development, 70：383-386.

7) 白井利明（1997）時間的展望の生涯発達心理学．勁草書房：東京

8) Taylor, J., & Ogilvie, B.C. (1994) A conceptual model of adaptation to retirement among athletes. Journal of Applied Sport Psychology 6：1-20.

9) 豊田則成・中込四郎（1996）運動選手の競技引退に関する研究：自我同一性の再体制化をめぐって，体育学研究 41：192-206.

本研究の一部は，平成８年度 筑波大学体育研究科プロフェッショナルスポーツ研究助成からの補助も受けた．